

巻頭言

東南アジア大陸部山地は照葉樹林文化の中心地でもあり、日本人にとっては懐かしい文化要素が残された牧歌的イメージが先行する地域かもしれない。しかし実際には激動の歴史の連続であった。具体的には、19世紀以降現在に至る150年ほどの間に、ヨーロッパ諸国による植民地化や国民国家独立のための戦争、内戦、イデオロギーの対立、急激な市場主義経済の導入、グローバル化、中国の政治経済的台頭などを経験した。そしてその過程で、自然環境とそこで暮らす人びとの暮らしには大きな変化が起きた。

変化が激しかったことに加え、戦争やイデオロギー的対立の時代が長かったこともあり、これらの地域における自然と人びとの暮らしに関する具体的な情報はいまだ十分に蓄積されていない。『ゾミア』論の提出とそれに関する多くの研究者による検討が示すように、これらの地域の歴史的解釈にもまだ議論の余地がある（スコット 2013）。

学術的空白を埋めるための最初のステップは情報の蓄積であろう。そのために筆者らは、CIRAS センターの共同研究「東南アジア大陸山地部における長期的生業動態とデータベース化」（代表：広田勲、2020年度）と「東南アジア大陸山地部の過去の生業記録のデータベース化および資料集成の作成」（代表：広田勲、2021年度）を利用して、これらの地域に関する資料の検討をおこなってきた。本書では、その結果を資料集成として報告する。対象とするのは、ベトナムとラオスの山地部に関するフランス語資料である。これらの地域は、19世紀後半以降、フランスによる植民地支配を受けた。年代を記せば、1862年の第一次サイゴン条約から1884年の第二次フエ条約までの長い過程を経て、フランスがインドシナ（現在のベトナム、ラオス、カンボジア）全域の支配権を獲得した（桜井 1999）。さらに、管轄の異なった地域を一括して植民地省に統合した後、1887年、フランス共和国全権を持つインドシナ総督のもとに、フランス領インドシナ連邦が成立した。それまで保護領であったラオスも1899年、連邦に編入された。資料集成の作成にあたり、植民地化以降におけるフランス人官僚や研究者、探検家らによる多数の報告書の中から、可能な限り、現地の実情を記載した報告書を選んだ。残された報告書も多い。随時、情報の蓄積を進めたい。

引用文献

- 桜井由躬雄．1999．「植民地下のベトナム」、『東南アジア史Ⅰ 大陸部』石井米雄・桜井由躬雄（編）．山川出版社．
- スコット，J．2013．『ゾミア 脱国家の世界史』，佐藤仁（監訳），みすず書房．（Scott, J. C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, Yale University Press.）